

こ いけ よう いち
小 池 洋 一

ラテンアメリカは他の発展途上地域に比べて長期にわたる工業化の歴史をもつ。また、他の発展途上地域の工業化が先進工業国からの直接投資など対外的な衝撃によって始動されたのに対し、ラテンアメリカでは外からの衝撃以前に産業資本家層が形成され工業化の進展において重要な役割を果たしたことが知られている。

本特集は、経済主体である企業の活動に着目してラテンアメリカの産業発展、あるいは広く工業化の過程とその性格を明らかにしようとするものであり、1988年度に実施した「ラテンアメリカの工業開発と企業経営」研究会の成果である。こうした研究の出発点は、企業活動のいかんが産業の発展、工業化のテンポと方向を決定するという認識にある。経済学あるいは経済史学ではブラックボックスのなかにあった企業の役割を積極的に評価するわけである。同時に、こうした研究はラテンアメリカの工業化過程の解明に豊かな情報を与え、時には工業化に関する「通説」に対して異論をなげかけることになるかもしれない。

企業活動に着目することは以上のような意義をもつが、研究はまだ緒についたばかりである。ラテンアメリカに関しては日本国内の先行研究は皆無に等しい。このことはラテンアメリカ研究一般の中心であるアメリカ合衆国においてもほぼ同じである。たとえばハーバード・ビジネススクールの『経営史学雑誌』(*Business History Review*)でとりあげられるラテンアメリカに関する論文はきわめて少なく、さらに多くは鉄道、石油、電力など一部の産業に偏っており製造業は少ない。こうした研究の遅れの一部は企業の「閉鎖性」にもとづく情報の不足に起因するものである。

その意味で本特集はラテンアメリカの企業研究のささやかな一歩と評価できよう。一般に企業研究は先行研究と情報の不足から客観的事実の確認に高い価値をおく傾向があるが、客観的事実の確認からそれらの概念化、抽象化に研究をすすめる必要があろう。さら

に、(マーシャルの森と木の比喩のとおり)企業という個々の木だけをみているは産業という森の動きはつかめないという問題がある。したがって、企業研究にあたっては企業、産業、経済の間で視点を常に往復させる必要がある。研究会実施にあたってはこれらの点について常に考慮したが、なお課題として残されている点が多い(注1)。

さて、以下収録した論文その他の内容をごく簡単に紹介し、本特集の案内としたい。

「ブラジルにおけるビール産業の発展と企業集中」(小池)は、綿業などとともに初期工業化の主導部門であったビール産業の発展とその過程の基本的特徴である企業集中・市場の寡占化、その下での企業競争を論じたものである。流通系列化など差別化は少数の企業の市場支配をもたらしたが、その支配が必ずしも安定的でないことが示されている。

「ブラジルにおける自動車産業の発展——組立部門の競争形態と部品部門の構造変化——」(田中)は、1960年代後半の企業集中・再編を契機とする自動車メーカーの競争戦略の変化(製品差別化・非価格競争へのシフト)と、それにとまなう自動車組立・部品工業の分業関係の変化(組立メーカーの内製率上昇と中小部品メーカーの組付市場からの脱落)を論じている。

「ブラジルにおける一日系人の企業者活動——山本勝造とその経営理念——」(小池)は一日系人企業家の経済活動とその内発的動機である経営理念を論じたものである。山本の経営理念に、移住前に祖国日本で関係した鈴木商店の国益志向的考え方が影響を与えていることを明らかにするとともに、その理念が日系移住者一般に共通するものであることを指摘している。

「世紀転換期メキシコにおける近代綿業の展開——『アヒオティスタ』から移民企業家への担い手の移動——」(佐藤)は19世紀末以降発展期をむかえるメキシコ綿業の経済主体を論じたものである。この時期の綿産業の担い手はフランス系など移民企業家である。彼らの場合は、メキシコに居住し会社を支配したこと、利潤をメキシコ国内の他産業に再投資した点で、外国人企業家と異なり、工業化を担う民族資本形成の一端を担うものであると評価している。

「メキシコの民族系企業グループの発展要因——自動車部品工業におけるデスク・グループの事例——」(星野)は、自動車部品工業の発展とその要因をこの分野最大の企業グループを事例に論じたものである。部品工業が政府の産業政策に対応して部品生産を多様なものにさせてきたこと、発展の過程で外国の資本、技術をとり込み利用してきたことが示されている。こうした事実は経済発展にともない民族系企業の役割が後退するという、一般になされている議論とは異なるものである。

「アルゼンチンの経済発展とブンヘ・イ・ボルングループ」(J・シュバルツェル)はアルゼンチン最大の企業グループの歴史を国民経済の発展過程との関連で論じたものである。ブンヘ・イ・ボルンは穀物輸出から出発し後に多様な工業を営むが、その活動の歴史はアルゼンチンの経済発展の歴史そのものである。著者はまた、会社支配の同族的性格と競争排他的な企業行動が経済発展の担い手としてのブンヘ・イ・ボルンの限界となったことを、暗示している。その限界はまた今日のアルゼンチン経済の停滞にもつながるものであろう。

以上が本特集を構成する論文、資料の紹介であるが、それぞれ議論が不十分な点が多々あるものと思われる。読者のご批評を期待したい。最後に、こうして成果が発表にまで至った背景にさまざまな方々のご教示とご助力があったことを記しておきたい。とりわけ専門員としてご指導いただいた米川伸一先生(一橋大学)、下川浩一先生(法政大学)および、いちいちお名前はあげないが研究会講師その他の方々に、改めてお礼を申しあげたい。

(注1) 企業史あるいは広く経営史研究の方法と課題についてはたとえば、中川敬一郎「経営史学の方法と問題」(経営史学会編『経営史学の二十年——回顧と展望——』東京大学出版会1985年)を参照。

(アジア経済研究所経済協力調査室)